

【研究ノート】

相互行為としてのまちづくり

筒井 琢磨

Machizukuri As Social Interaction

Takuma TSUTSUI

皇學館大学現代日本社会学部

日本学論叢 第12号

令和4年3月

相互行為としてのまちづくり

筒井 琢磨

抄録 ●

本稿では、筆者が第3の立場と呼ぶ、「まちづくり」を社会的相互作用とみる立場から地域研究が可能であることを提案する。まちづくりの計画段階を重視する立場が第1の立場、まちづくりの活動段階を重視する立場が第2の立場である。

筆者が採用する第3の立場は、ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論に基づく。理論的検討のために、筆者は参与観察法、アクティヴ・インタビュー、会話分析の3つの調査手法に言及する。

ブルーマーは自分の理論の中で自己の存在を強調する。第3の立場からの地域研究も自己の存在についての考察が必要である。

以上に加え、筆者は自己アイデンティティ概念と同様に、地域アイデンティティ概念の地域研究への導入を提案する。

Key words : まちづくり, シンボリック相互作用論, 自己, 地域アイデンティティ

はじめに

筆者は長らく地域社会でのまちづくり活動に関わってきたが、研究対象として関わってきたというよりも、学生が地域社会で主体的に学習する機会を確保するために関わってきたと感じている。筆者自身も関わっていく中で、まちづくり活動の必要性や多様性について学ぶことができていく。お世話になってきた地域社会関係者には、地域社会への関心が高い学生を地域社会に貢献できる人材として育てていくことが恩返しと思い、そのように関わってきた。しかし、研究者として研究成果を積極的に地域社会に還元する形で恩返しすることを

怠ってきたことを深く自省している。いわゆる参与観察法としての自らの研究の進め方をしっかりと考えてこなかったことが地域研究を進めなかった根本的な要因である。

そこで本稿では、「まちづくり」という語を手がかりにして、今後筆者が進めるべき地域研究の方向性と方法を考察し、新たな地域研究のスタートラインに立つことを目的とする。

なお、題名の「相互行為」は interaction を訳したものだが、社会学では「相互作用」の訳も使われる。本稿の引用文中では「相互作用」が使われているものばかりなので、混乱を避けるため、本稿の題名でのみ「相互行為」を用い、文中は主に「相互作用」を用いて論じる。

1 まちづくり活動について

「まちづくり」という語がいつから使われだしてどのように定義されているか、英語に翻訳するとどのように表現されるか、検討すべきことは多い¹⁾。本稿では詳細な検討を省略し、大まかに「まちづくり」の語が一般的に2つの立場で使われていることを指摘するにとどめておきたい。

第1の立場は、地域社会の理想的な在り方を見据え、地域社会での諸活動の方向性を考える立場である。「都市計画」という語の使われ方と近いと考えられる。たとえば、田村²⁾は「都市計画」と比較して、「市民主体」「総合性－ハードとソフト」などのキーワードを挙げて「まちづくり」の方向性を示唆する。また、石原³⁾らは彼らの編著の副題が示す通り、地域再生の「見取り図」として「まちづくり」の方向性を模索する。

第2の立場は、地域社会の理想的な在り方を実現しようとする地域社会での諸活動の実際の成果を重視する立場である。たとえば、竹本⁴⁾は約10年間かけて沖縄を除く全自治体の現地取材から「まちづくり」実践例をまとめている。「市民活動」や「社会教育活動」等の語の使われ方と近いと考えられる。

この2つの立場は、切り離されるものではなく計画段階と実施段階というように時系列的につながっているものであり、同じ「まちづくり」を捉える視点の向きが異なるだけである。

2 第3の立場

本稿では第3の立場に立って、「まちづくり」についての研究の方向性や方法を検討してみることにしたい。第3の立場とは、「まちづくり」という語の意味が人々の中でどのように語られ、扱われ、実際の活動に結びつくかに注目する立場である。第1の立場と第2の立場の間の過程を重視する立場と言い換えることができる。

この第3の立場の発想は、社会学者ハーバート・ブルーマーの、既存の社会科学や心理学による行動説明図式への批判を貫く論理から得られたものである。ブルーマーは、社会科学にせよ、心理学にせよ、その行動説明図式において行動決定要因と行動をストレートに結びつけている点を批判する。社会科学で行動説明に用いられる要因として例えば、「地位上の位置、文化的規定、規範、価値、サンクション、役割要求、社会システムの要件」⁵⁾を置き、観察される行動をこれらの要因によって説明しようとする。心理学では同様に、「動機、態度、隠れたコンプレックス、心理学的組織の要因、心理学的な過程」⁶⁾を置き、これらの要因によって観察される行動を説明しようとする。ブルーマーが注目するのは、要因と行動の狭間にある、人々の社会的相互作用 (social interaction) である。

ブルーマーが立脚する理論をブルーマーは自らシンボリック相互作用論 (Symbolic Interactionism) と呼ぶ (以下、「SI」と略す) が、SIには理論的前提が3つある。

第1の前提は、「人間は、ものごとが自分に対して持つ意味ののっとして、そのものごとに対して行為する」⁷⁾というものである。ものごと (things) は物理的な対象 (木、椅子等) に限らず、他者 (母親、店員等)、他者カテゴリー (友人、敵等)、制度 (学校、政府等)、理念 (個人の独立、誠実等)、他者の活動 (指令、要求等)、状況 (日常生活の出来事等) と幅広くブルーマーは捉えている。

第2の前提は、このようなものごとの意味は「個人がその仲間と一緒に参加する社会的相互作用から導き出され、発生する」⁸⁾ということである。ブルーマーは意味の起源として伝統的な2つの説明を上げる。1つ目は、意味はもの

ごとに内在的なものであり、客観的にそのものごとを観察すれば取り出されるという説明である。意味は生成されるものではなく外へ放射されるものであり、必要なものごとに内在する意味を認識することだけであるという見解である。2つ目は、ものごとの意味はある個人によって心理的に構成されたものであるという説明である。典型的には、その個人の中に意味が生成される過程を「知覚、認知、抑圧、感情の転移、観念の連合」⁹⁾といった心理的な要素と関連づけて説明する。これら2つの伝統的な説明に対し、SIのこの第2の前提は、意味を社会的な産物であると説明するものである。ある個人にとってのものごとの意味は、「そのものごとに関して、他者がその個人に対して行為する、その行為の様式の中から生じてくる」¹⁰⁾と説明するのである。実際の相互作用から意味が生じるのであれば、その相互作用を観察することで意味の発生過程を知ることができることになる。

第3の前提は、このような意味は「個人が、自分の出会ったものごとに対処するなかで、その個人が用いる解釈の過程によってあつかわれたり、修正されたりする」¹¹⁾ということである。人々が意味を使用する際、社会的に生成され確立された意味をそのまま自動的に使用するわけではなく、解釈の過程を伴うということである。ブルーマーは、この解釈の過程は2つの段階を含んでいるとする。第1の段階は、行為者が「それに対して自分が行為しているものごと、自分に対して指示 indicate する」¹²⁾段階である。この段階は「行為者が自分自身と相互作用する、ひとつの内在化された社会過程」¹³⁾である。第2の段階は「自分の置かれた状況と自分の行為の方向という見地から、意味を選択したり、検討したり、未決定にしたり、再グループ分けしたり、そして変形させたりする」¹⁴⁾段階である。このように解釈の過程は、自分自身との相互作用を含み、個人が意味生成・伝達に受動的に関わるのではなく主体的に関わる過程である。

以上、長くなったが、第3の立場はブルーマーの議論を「まちづくり」に当てはめた考え方である。整理すると次のようになる。理念的な観点から「まちづくり」を捉えようとする第1の立場は、まちづくり活動を導くと考えられる社会的要因から「まちづくり」を説明しようとする立場である。また、まちづくり活動の社会的要因をあまり重視しない第2の立場は、実際のまちづくり活

動の結果・成果を明らかにしようとする立場である。これらに対し、第3の立場は、まちづくりを人々の社会的相互作用として捉え、この社会的相互作用の観察の中から「まちづくり」の意味がいかに生成され、いかに変容していき、実際のまちづくり活動につながっていくかを説明しようとする立場である。

3 社会的相互作用に着目した地域研究について

第3の立場による地域研究を進めるためには、まちづくり活動計画（第1の立場）やまちづくり活動成果（第2の立場）ではなく、まちづくり活動を行う人々の社会的相互作用が研究対象となる。

筆者が担当する「質的調査論」授業で使用しているテキスト¹⁵⁾では、第1の立場や第2の立場をとる社会調査は実証主義的方法、第3の立場をとる社会調査は解釈主義的方法をとると整理しているが、2つの方法の最大の違いは、主観的意味を「事実」として扱うかどうかであるとする。つまり、実証主義的方法は客観的に把握される「事実」のみを扱い、主観的意味は「事実」として認定しない、すなわち主観的意味を扱わない態度を取り、解釈主義的方法は主観的意味を「事実」として扱い、むしろ主観的意味を主な分析対象とする態度を取るのである。解釈主義的方法による地域研究、とくにまちづくり活動研究の方法は、まちづくり活動を通じて、人々が「まちづくり」にどのような意味を付与し、繰り広げられる社会的相互作用の中でどのように解釈して、実際にどのような活動を行っていくのかをデータとして収集していくことになる。

このテキストを用いて授業で扱っている事項で、社会的相互作用に着目した地域研究にとって重要な事項が3点ある。

1点目は、参与観察法を扱う際にまず議論される、調査者が人々の中に入り込んで観察を行う時の関わり方についての①完全な参加者、②観察者としての参加者、③参加者としての観察者、④完全な観察者の古典的な4類型についてである。

近年、研究倫理を遵守することが社会的に求められる中、今や調査者が自らの正体を明かさずに人々の活動に参加して研究を進める①は明らかに調査倫理違反であり、絶対に避けなければならないことは明白である。①に近い例とし

て、たとえば行政等からの大学への要請で地域情報に関わる業務（委員等）に携わっている場合、業務上知り得た情報を地域研究のデータとすることは個人情報保護法違反や個人情報条例違反にも該当するであろう。研究を開始するのであれば、業務とは別に研究計画書等を提示してインフォームド・コンセントを得るなど、しっかり手続きを踏まえる必要がある。

筆者の場合、学生が地域社会で主体的に学習する機会を確保するためにまちづくり活動に関わってきており、大学教員であることは認知されているので①にはあたらないが、地域情報に関わる業務に携わっているのとよく似た立場にあると考えられる。この点が地域研究への着手を今まで筆者が躊躇していた理由の一つであり、地域情報に関わる業務に携わっている場合と同様にしっかり手続きを踏まえることが求められるであろう。

2点目は、アクティヴ・インタビュー¹⁶⁾に代表される、意味形成過程に積極的に関与する調査者についてである。参与観察にせよ、フィールドワークにせよ、調査者が人々の社会的相互作用を観察する時、調査者自身も意味生成・変容過程に大いに関わっていることを自覚する必要がある。つまり、調査者が収集するデータには調査者自身の存在・関与も含まれているのである。現場では決して調査者はいるかいないかわからない空気のような存在にはなり得ないのである。むしろ、新しい価値創造に調査者が自覚的に貢献する覚悟で調査に臨むことが求められる。

3点目は、会話分析を扱う際によく議論される、社会構造と相互作用過程との相互反映性についてである。このテキストには次のように記されている：

個々の発話のディテールにこだわることで、会話分析は〈ミクロ〉分析であると言われるが、これは誤りである。個別的な現象はそれが埋め込まれている社会構造に対する人々の理解を抜きには考えられないと同時に、社会構造は個別的な現象のなかで参照されることでしか出現しない。両者の相互反映的なあり方を記述するのが、会話分析である¹⁷⁾。

会話分析に限らず、社会的相互作用過程を研究対象とする場合に社会構造的

な要素（権力構造、制度、ジェンダー等）がいかにその過程に出現するかも記述し、分析する必要がある。地域研究の場合、すでに制度化された法的・経済的な枠組の中で、ある程度の秩序をもった組織体内部で生じる社会的相互作用過程を観察することが多くなると考えられるが、引用文中にある「相互反映的なあり方」を念頭に置いておく必要がある。

4 自己との相互作用

社会的相互作用に着目した地域研究を進めるうえで、もう1つ留意すべき事項がある。ブルーマーがSIの第3の前提として提示した、解釈の過程である。ブルーマーは、社会的相互作用を自己との相互作用段階と他者との相互作用段階に分けて捉えるが、前者が後者を成立させる条件になっているとブルーマーは論じている。すなわち、人間が自己との内的相互作用を行う能力を持つことができるが、他者との社会的相互作用によって意味を生成し、その意味に関連づけて自ら社会的行為を行うことを可能にするのである。自己との相互作用が他者との相互作用に結びつく過程をブルーマーは役割取得という概念で説明している¹⁸⁾。

この事項は、社会的相互作用に着目した地域研究でも、自己の存在を無視して進めることができないことを表している。前節で挙げたアクティヴ・インタビューにおいても、インタビューの間、インタビューイとインタビュアーは社会的相互作用を行っているのであり、両者とも同時に自らの自己との内的相互作用を行っているのである。

5 地域アイデンティティ再考

著者はかつて、地域社会を学ぶことの意義として、地域アイデンティティの重要性に気づくことを挙げた。地域アイデンティティとは、CI (corporate identity 企業アイデンティティ) の考え方を援用したもので、地域社会を組織や集団とみなし、組織や集団としての一体感を保つこと、また、その同一性を維持するための様々な取組と定義した。そして、次のように記した：

地域アイデンティティについてはもう1つ注目すべき観点がある。フィールドワーク重視の意義の項で述べたが、フィールドワーク体験は自分という存在をあらためて考え直すことに結びつく。地域社会の人々との相互作用の中で地域で生じる様々な事象が持つ意味内容が生み出されていく。「地域」という記号（シニフィアン）に胸躍らせてフィールドに飛び込む学生や研究者がその意味内容（シニフィエ）を取得するのは地域という空間ではなく、また、意味を受動的に受け止めるわけではなく、地域の人々との相互作用の中で、その時、その場で、意味創出の当事者として関わるのである。そして、新たなシンボルや意味の創出は、必然的に自己定義にも影響を与える。新たなシンボルや意味は、自己の構成要素としてのシンボルや意味にもなり得るのである。このように考えると、地域アイデンティティの追求は自己アイデンティティの変革に結びつく。そして、おそらく、地域アイデンティティの追求には、自己アイデンティティの変革を恐れない人間が必要になってくると思われるのである。「地域」も「自己」も自ら「構築」するのである¹⁹⁾。

地域アイデンティティの追求を通じて、地域社会で相互作用が「自己」の意味も「地域」の意味も変容させてゆく可能性を指摘した箇所である。本稿における地域研究の文脈に地域アイデンティティ概念を位置づけると次のようになる。社会的相互作用に着目した地域研究を進めるうえで、前節では自己の存在にも目を向ける必要性を指摘した。実際の社会的相互作用の中に自己がどのように表されるかは、語り手は自分をどのように言い表すかが手がかりとなる。その際、自己イメージが地域社会との関連で言い表されるとき、自己イメージの中に地域社会イメージが位置づけられる。解釈過程を経て、自己イメージは地域社会イメージに引きずられて変容し、地域社会イメージも同様に自己イメージに引きずられて変容していく。地域アイデンティティは、流動的に変化していく地域社会イメージの中から戦略的に選ばれたイメージであると定義することができる。数多くのスナップショットから選ばれたベストショットという表現をしておきたい。

しかし、地域アイデンティティという概念自体は、実際にはまだまだ得体的に示れない概念である。明確な定義が必要な概念でなく、研究を開始する際にとりあえず暫定的に示す、ブルーマーの言う感受概念といった扱いにとどめておきたい。地域社会での相互作用の中で、まちづくり活動に有効な概念になっていくことに期待する。

また、本稿における「まちづくり」も1つの感受概念として受け止めていただきたい。

おわりに

本稿は「まちづくり」について論じたものではなく、地域研究方法の一つとして「まちづくり」の意味（の生成や変容）を人々の社会的相互作用から拾い上げ、「まちづくり」活動にどのように結びつくかを分析してみようという提案である。分析にとどまらず、まちづくり活動の発展に結びついていくようなアイデアや実践を生み出すところまで地域研究を進めていきたいと考えている。

註

- 1) ウェブ上で見られる「まちづくり」の英訳は様々である。「まち」の部分をも town, community, urban 等と訳し、「づくり」の部分をも development, planning, building 等と訳し、両者を足すパターンのものである。どの語を使うかで込められた意味合いが変わってくるであろう。中には machizukuri とする例もあり、本稿でもこの語を採用する。
- 2) 田村明『まちづくりと景観』岩波書店、2005年。
- 3) 石原武政・西村幸夫編『まちづくりを学ぶ－地域再生の見取り図』有斐閣、2010年。
- 4) 竹本昌史『地方創生まちづくり大事典』国書刊行会、2016年。
- 5) ハーバート・ブルーマー「シンボリック相互作用論の方法論的位置」『シンボリック相互作用論』勁草書房、1991年、9頁。
- 6) 同上9頁。
- 7) 同上2頁。

- 8) 同上 2 頁.
- 9) 同上 5 頁.
- 10) 同上 5 頁.
- 11) 同上 2 頁.
- 12) 同上 6 頁.
- 13) 同上 6 頁.
- 14) 同上 6 頁.
- 15) 谷富夫・芦田徹郎編著『よくわかる質的社会調査 技法編』ミネルヴァ書房, 2009年.
- 16) ホルスタイン・グブリウム『アクティヴ・インタビュー』せりか書房, 2004年.
- 17) 谷富夫・芦田徹郎編著『前掲書』107頁.
- 18) ハーバート・ブルーマー『前掲書』16頁.
- 19) 筒井琢磨「地域創生コースについて」『皇學館大学日本学論叢』皇學館大学現代日本学会, 第11号, 148-149頁, 2021年 3 月.

【Research Notes】

Machizukuri As Social Interaction

Takuma TSUTSUI

Abstract

On this paper, I suggest that we can make community studies from the perspective that we see community development activity, “machizukuri”, as social interaction. I call this perspective the third one. I call the perspective that emphasizes planning phase of machizukuri the first one. And I call the perspective that emphasizes activity phase of machizukuri the second one.

The third perspective that I will adopt is based on Harbert Blumer’s symbolic interactionism theory. For theoretical investigation, I examine three research methods; participative observation, active interview, and conversational analysis.

In his theory, Blumer emphasizes the presence of selfhood. Our community studies from the third perspective need consideration of the presence of selfhood, too.

In addition, I suggest that we can introduce an idea of local identity as well as an idea of self identity to our community studies.

Key Words : machizukuri community study symbolic interactionism
selfhood local identity

